

五島沖潜航記

鎌田 泰彦 (長崎大学地学教室)

昭和39年10月13日午前10時50分、私は五島列島南端の津多羅島(富江町)南方6.2哩沖合の深さ212mの海底に到着した。その時こそ、これまでかつて経験したことのない感激的な一瞬であった。読売新聞社が2ヶ月間にわたって行った九州一周海底調査の第1回目の五島列島周辺調査に参加し、深海作業潜水船「よみうり号」に同乗して200mを越える深海の姿を見ることのできたことである。

早朝7時15分に「よみうり号」は母船の第23卓成丸(162t)に引かれて富江港を出発し、9時35分に潜船地点に着いた。すぐに曳航のロープがはずされ、大場総指令と3人の乗組員、同乗者として私と富江漁協の福島組合長の6人がチャッカーで「よみうり号」に乗り移った。艇内の測深儀は220mを示している。この時の調査の目的に2つあった。第1の目的は陸棚から大陸斜面にかけての海底地質の変化を観察してることであり、第2にはこの変換点付近にある瀬の深海サンゴの生態調査である。福江島南方では大陸棚の外縁部の深度が180mであり、この外測は急に深度を増して男女群島との間を北上する一大海谷に落込んでいる。

10時21分潜航を開始するとすぐに船の動揺はなくなる。観測窓からのぞくと、マリンスノーが上へ上へと昇ってゆく様子で潜航

し始めたことを間接的に知る丈である。

100mを越えると外は暗黒の世界になり、船内も次第に涼しくなる。沈み始めてから29分後着底した。船底の観測窓より見下すと、投光器で照らされた海底は貝殻まじりの粗い砂で、小さなツノガイや巻貝が手に取るように見える。丁度有明海の水深30mあたりから採泥器で採取したサンプルを見ているような錯覚にとらわれる。

大場総司令の前進命令がかかる。ライトに照らされて次々にあらわれる海底の様子を前面の観測窓にかじりついて見つめる。海底は全く起伏のない荒蕪たる平坦な砂原が続き時折30cm位の高さの真白いイソギンチャクが大根を立てたように、ぽつんぽつんと眼前にあらわれてはすぐに視界を去る。「よみうり号」はまるで深夜の人気のない砂漠の中の高速道路を高級車で走るように動揺もなく前進する。乗船前、海底を走り廻るのは真暗闇の野っ原を、懐中電燈1つで歩くのとよく似ていると言っていた総司令の言葉が、全く当を得たものであることが判った。

行けども行けども貝殻のまじった砂質の海底が続く。ふと長さ20cm程のタイラギが殻頂を底につけて立っているのに気付く。タイラギは、有明海などで水深20m位の砂質に好んで生息する二枚貝で、貝柱はにぎり寿司のたねとして珍重されている。しかし、こん

な深い海に棲んでいるという記録は今まで恐らく報告されていないだろう。時折、径30~50cmくらいの石灰質の塊が庭石を置いたように砂地の上に、点在している。この塊の上を船が通るとき、底がガサッと音をたてるので、多分生物起源の石灰質のものと考えたのである。この塊の周囲は溝のように浅く窪み、この中には、はでな色彩の魚が頭をつっ込んでいることが多い。魚は近づいても決して逃げ去らないでゆったりと泳いでいる。アカエイ、ホウボウ、ミノカサゴ、マダラチョウザメ、それに目玉がよく光る鮮やかな色がついたイカなどがいたが、決して同じ種類が集まって群をなしてはいない。よく見る海中映画の場面とはその点頗る違ったものがある。

水深が200mを割って190m台に入った頃底質は更に粗くなった感じを受け、愈々深海サンゴの生息所に近づきそうな気配がした頃、母船より、海上が風が強まったので浮上せよと水中電話で連絡を受け、早刻海底砂漠の40分間の旅を終えて浮上体制に入る。暗黒の海底より次第に青味を増してくる水の色の変化の速度は沈降のときよりも早くおよそ15分で太陽光線に輝く海面に戻った。

「よみうり号」の潜航能力は深さ300mであり、水中で4ノットの速力で移動し、約6時間の水中作業が可能である。折角の機会に僅か40分しか調査できなかつたのは残念であったが、少なくとも大陸棚の外側の大陸斜面に相当する部分の一部でもこの目で見たことは豊富な体験である。我々は大陸斜面がかなりの急斜面をもっているような錯覚を起しながらであるが、世界的平均が $4^{\circ}17'$ という値が示すように、殆んど傾斜が感じられ

ない位の斜面である。五島沖の40分間の海底の航走で、水深212m~195mまで移動したが、海底は、全く水平としか感じられなかった。

一般に大陸棚の縁で大陸斜面へと急に傾斜の変わる場所の深さは200mとされている。しかし実際の世界的平均は約130mであり、日本列島近海ではおよそ140~160mの深さである。大陸棚の上にも多くの起伏があって、隆起部があったり、海谷や段丘の発達も知られているが、大局的には頗る平坦で、平均傾斜は $0^{\circ}07'$ を示している。大陸棚から大陸斜面に変る場所は、大陸と海洋との境に当る重要な部分であるが、この陸棚の縁辺部には屢々岩盤が露出したり、著しく礫質の粗い堆積物で覆われたりすることがある。この現象について多くの地質学者は、その原因を第四紀の氷期における海面低下の時期の海岸線附近の性質が、後氷期の現在の海面下に保存されていると解釈している。こんな意味から私が肉眼（近視のメガネを通してではあるが）で見えてきた、陸棚外縁部の海底地質の知識の増加が渴望される訳である。

10月18日の読売新聞は取材に当たった和田記者（大阪読売）の書いた次のような記事をおせている。

（前略）「これら海洋資源に関係する調査とは別に鎌田博士は津多羅沖の大陸棚縁辺部に調査の焦点をしぼり、地質調査と氷河期（1万~100万年前）の遺物発見につとめた。海底は荒れ果てた砂地で、その上タマキガイ、ツノガイの殻が散乱していた。ツノガイ、タマキガイとも浅海性の貝である。氷河時代海岸線が後退して津多羅島沖まで陸地になったとき、貝は陸岸近くの浅海に生息していたがその後海水の上昇で貝は沈んだとみられる。よみうり号が観察した海底は氷河期の貝の墓場であった。」